様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｋ１６７１４

研究課題名（和文）亡命知識人バラージュにおける文学と映画―分野横断的実践についての包括的研究

研究課題名（英文）Bela Balazs's Activities in the Field of Literature and Film: An Integrated Study on his Multidisciplinary Practice

研究代表者
岡本　佳子（Okamoto, Yoshiko）

東京大学・教養学部・特任助教

研究者番号：９０７５２５５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はハンガリー出身でのちにヴィーン、ベルリン、モスクワで活躍した劇作家・映画評論家のバラージュ・ベーラ（1884-1949）に関する研究である。2年間の研究期間で、青年期のブダペシュト時代から亡命後のヴィーン時代までに焦点をあて、彼の評論・実践双方を含む舞台・映画活動と、ドイツ語とハンガリー語による著作間の影響関係について分析した。特にバラージュの亡命前後である第1次世界大戦末期の活動についての研究が進展し、のちに映画理論に繋がる演劇論と人形劇や舞踊といった創作作品を考察した論文等の成果を残すことができた。

研究成果の概要（英文）：This study deals with Bela Balazs (1884-1949), a Hungarian poet, playwright, and film critic who lived in Budapest, Vienna, Berlin, and Moscow during the first half of the twentieth century. During the two-year study period, I looked at Balazs's early activities in Budapest and Vienna, where he lived after escaping from the White Terror, and analyzed the relationship between his theory (Hungarian and German) and practice in the film and theater fields. As the result of this study, especially the analysis of his works at the end of WWI, I published articles on Balazs's theater theory and puppet plays, which apply also to the field of film.

研究分野：芸術学、ハンガリー文化研究

キーワード：バラージュ　映画　文学　ハンガリー　舞台芸術

１．研究開始当初の背景

本研究「亡命知識人バラージュにおける文学と映画―分野横断的実践についての包括的研究」は、ハンガリー出身でのちにヴィーン、ベルリン、モスクワで活躍した劇作家・映画評論家のバラージュ(1884-1949)に関する研究である。

バラージュは映画美学の嚆矢として多くの映画理論家へ影響を与えたことが指摘されているが、これまでその活動の詳細、とりわけブダペシュト時代の文学作品と亡命後の活動の関係を明らかにする研究は少ない状況だった。ジュッファによる伝記やレンケイが多くの解説記事で指摘されているように、彼の遺した膨大な作品・評論はカタログ化することも困難なほどであり、多くの手稿資料が未整理の状態である。

特に亡命時代の活動はこれまでドイツ語による映画評論を中心に分析されてきたが、実際のところ彼はドイツ語文化圏での映画評論活動とともに、引き続きハンガリー語による作品・記事執筆によって政治活動をも行っていた。したがって言語的な横断だけでなく、分野をも横断する活動の多様性がバラージュの亡命時代を特徴付けるものであり、今後の研究が待たれる題材となっていた。

２．研究の目的

本研究では、青年期のブダペシュト時代から亡命後のウィーン時代までに焦点をあて、彼の評論・実践双方を含む映画活動と、ドイツ語そしてハンガリー語も含めた文学作品の間の影響関係について考察している。特に亡命時代のハンガリー語での活動にも焦点を当てているのが特徴で、ドイツ語とハンガリー語、映画と文学、批評と実践というバラージュの越境的な活動を明らかにし、最終的には芸術史における彼の業績の再検討を行うことが目的である。

本研究におけるより具体的な作業としては、はじめにバラージュの出発点となったブダペシュトでの活動を整理することにあった。バラージュが映画に注目したのはもっぱらヴィーン亡命後ではあるが、本作業はバラージュの思想形成の土台を確認し、亡命時代の文学作品と比較する上で必要不可欠なものである。

次に、本研究は亡命中であるヴィーン時代のバラージュの活動について調査を行なう。バラージュはヴィーンで芸術としての映画にいちはやく注目しドイツ語による評論活動を始め、これによって映画評論家・批評家として知られることとなった。しかしヴィーン時代の最初の約 3 年間は、ドイツ語による映画批評とハンガリー語による演劇評論や創作という言語による棲み分けが行われていたように思われる。そのため演劇と初期映画の理論の執筆はバラージュにとって、ハンガリー語とドイツ語による思考を媒介し、さらに演劇と映画という他の芸術分野をつなぐ営みであったのではないか。

以上の仮説から、調査では演劇理論『ドラマツルギー』（1918 年）を導入として、ヴィーン時代のハンガリー語による演劇論『演劇の理論』（1922 年）と、ドイツ語で書かれた映画理論『視覚的人間』（1924 年）を初めとする映画関連の評論・批評の比較を行い、彼の映画評論と演劇評論との親和性を示す作業を行なった。

『ドラマツルギー』を執筆した頃の第一次世界大戦末期は、2 度の革命によって成立した社会主義政権、ハンガリー評議会共和国（1919 年）においてバラージュが政治的な場に身を投じた時期であった。この政権はごく短命であったため活動の詳細は明らかになっておらず、さらに亡命時の混乱期にどのようにして他の亡命知識人らとネットワークを形成していったかは近年注目されている。亡命前後のバラージュの活動を整理することで、中東欧に関する文化研究と歴史学の分野の架橋が期待できると思われる。

３．研究の方法

本研究で用いる方法としてはバラージュの芸術作品の理論書、批評を対象としたテクスト分析が中心となった。また必要に応じて背景文化の研究のために手紙や新聞記事を利用した実証研究を行った。

平成 28 年度ではブダペシュト時代のバラージュの評論活動について研究を行った。具体的には彼の活動を整理しながら作品の読み込みを行い、さらに、バラージュの文献目録を補完する作業を行った。

平成 29 年度ではハンガリーで資料調査のフィールドワークを行いながら、バラージュの評論および文学作品の収集と読み込みを行った。そしてドイツ語とハンガリー語、映画分野と文学それぞれの著作を比較した。

４．研究成果

（1）成果内容

平成 28 年度はバラージュがブダペシュトで執筆・出版した作品や理論書について研究を行なった。

1902 年にブダペシュトに上京したバラージュは、はじめ劇作家や詩人として活動を開始している。それらの活動でバラージュが名声を得ることはほとんどなかったものの、私的な勉強会やサークルにおいて自身の専門分野として演劇理論を発展させ、

前述の演劇理論『ドラマツルギー』をまとめた。そのほかにも、当時交流のあった作曲家バルトークといった他の芸術家からの影響により、人形劇や舞踊劇を収録した『劇』（1917 年）など、多くの作品が生まれている。

これらの作品の内容を分析することで、『ドラマツルギー』はルカーチの演劇論から強く影響を受けているものの、ほとんど作劇しなかったルカーチの理論書と比較して、バラージュ自身の実践活動に裏づけされたものであることがわかった。さらにバラージュが演劇理論を自身の創作実践を意識しつつ執筆した可能性を提示することができた。

さらに、通常のビブリオグラフィに記載のない、短命に終わった雑誌『演劇』、『ルネサンス』、『アウローラ』での彼の著作の掲載状況をまとめ、ブダペシュト時代のバラージュの文献表を補完して一部発表した。

平成 29 年度は亡命中のウィーン時代のバラージュの活動について研究を行った。特に、亡命前のハンガリー語による理論や文学作品と、『視覚的人間』を初めとするドイツ語による初期映画の理論を比較した。具体的には『黒い壺』（1919 年）、『演劇の理論』、『視覚的人間』の比較分析、さらにクシェネクのバレエとして知られる『マモン』（1927 年初演）の譜面やそのリブレットについて資料調査した。

この作業の中で、バラージュの理論形成の過程には、当初想定していた演劇から映画という単純な構図ではなく、舞踊や人形劇といった中間的なジャンルを経由していること、そしてバラージュは積極的に亡命前後にこれらの作品に取り組んでいたことが明らかになった。本作業については終了後も継続して取り組む課題となる。

これらによりバラージュの遺した多様な活動の一端、特に時代によって分野横断的に変遷していく様が明らかになった。

（2）成果発表状況

本研究の具体的な成果発表は下記のとおりである。

- バラージュの作劇の実践と理論の関係性について、1918 年に刊行された演劇理論書『ドラマツルギー』の記述と実際の作品『劇』（1917 年）の比較を行う論文を査読付きの国内学術誌に投稿し、採択、掲載された。
- ブダペスト時代の演劇論とウィーン時代の映画論との連続性についてスラブ・ユーラシア地域研究分野の国際会議で発表を行った。
- これまで先行研究で言及されていなかった、もしくは書誌一覧に記載されていなかったバラージュの著作の書誌を日本語と英語でウェブ上で公開した。
- バラージュの人形劇の文体とその翻訳の際の課題と可能性について、ハンガリーのバラトンフュレドで 9 月に開催された日本語-ハンガリー語翻訳セミナーで発表を行った。
- 人形劇における実践と理論の関係性について、国内学会発表を行った。

さらに本テーマに関連する研究ノートを国内学会ニューズレターで発表したほか、本テーマに関する日本語で刊行済みの拙論文に新たな知見を入れて改稿した上で国際学術誌に投稿を行った。なお当該の国際誌は日本語で出版された論文の翻訳、改稿論文の投稿を認めていることを申し添える。

以上のように昨年度と今年度の 2 年間の研究期間全体を通じて、映画と文学、批評と実践というバラージュの分野横断的な活動の一端を明らかにし、芸術史における彼の業績の再検討を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

① 岡本佳子「バラージュ・ベーラによる舞踊と人形劇の議論――『劇』（1917 年）と『ドラマツルギー』（1918 年）を中心に――」『スラヴ学論集』第 20 号、159-175 頁、2017 年 3 月、査読有。

〔学会発表〕（計２件）

① 岡本佳子「1910 年代後半におけるバラージュ・ベーラの作劇と理論：『黒い壺』（1919 年）と「精神科学自由学院」の講演録を中心に」、2017 年 10 月 7 日、2017 年度東欧史研究会・ハプスブルク史研究会個別研究報告会、大東文化大学（東京）。

② Y. Okamoto, “Toward the Aesthetics of Film: Continuity from Dramaturgy (1918) and Theory of Theater (1922) by Balázs,” The 7th East Asian Conference on Slavic-Eurasian Studies, 24 September 2016, East China Normal University, Shanghai, PRC.

〔その他〕

ホームページ等
“Bibliography of Béla Balázs,”
https://researchmap.jp/mudavtau3-1790730/#_1790730

６．研究組織

(1)研究代表者

岡本　佳子（OKAMOTO, Yoshiko）
東京大学・教養学部・特任助教
研究者番号：９０７５２５５１